

防災の新常識、最新事情・2  
～本震の後に、また本震！～

---

●常識を覆した熊本地震

地震活動の典型的なパターンは、  
大きな地震が発生後、その場所の周辺で  
それより小さい地震が多数発生する  
「本震－余震型」と呼ばれるものです。

ですが平成28年(2016年)の熊本地震では、  
4月14日に大きな地震(M6.5)が起き、  
2日後の4月16日にはさらに大きな地震(M7.3)が発生しました。

「大きな地震の後は、より大きな地震はこない」と考えられていた、  
地震活動の“常識”が覆されることとなりました。

●油断大敵

熊本地震では、最初の地震で無事だった家が、  
2回目の地震で倒壊。  
家に戻っていた住民が下敷きになるという被害も出ました。

これまでの  
「余震に注意」という呼びかけでは、  
より強い地震は来ないと誤解を生んでしまうことから、  
気象庁は「地震に注意するよう」へと  
呼びかけを変更しています。

大きな地震が起きたあとも油断大敵です。

●新耐震基準は絶対ではない

熊本地震では、「新耐震基準」で建てられた家も被害に遭いました。  
新耐震基準とは、  
「人命を守るために1度の大地震で建物の倒壊を防ぐ、最低限の耐震性能」です。

「強い地震が複数回発生した場合でも安全な建物である」という基準ではないことを、  
しっかり認識しましょう。

●テントの活用も考えよう！

熊本では2度の本震後も揺れが続いたことで、  
建物の倒壊などを恐れて避難所に入らずに  
車中泊をする避難者も数多くいました。

車中泊は、エコノミークラス症候群など  
健康被害を招く恐れがあります。

地震が続く場合に備えて、  
「テントで生活」するという選択肢も考えておきましょう。  
実際、熊本県の益城町に作られたテント村では、  
最大時に156世帯、571人（5月11日）がテント生活を送りました。

アウトドアでの経験や用品は、  
災害時に大変役立ちます。

（一財）防災教育推進協会 笠間 正弘